［課程―２］

審査の結果の要旨

氏名　　織壁里名

本研究は、統合失調症のヒトモデルとして研究されてきた背景がある覚せい剤精神病を、覚せい剤精神病患者と健常者のMRI脳画像の関心領域の体積を比較することにより、疾患の病態特異性を解明しようと試みたものである。内因性の精神疾患である統合失調症に対し、覚せい剤精神病は、明らかに発症に覚せい剤使用が関係している外因性精神疾患である。脳形態異常が確認できれば、それらと薬物の使用期間、使用方法、精神症状、その症状の発現から消失までの期間など、臨床評価との相関が、明確にかつ客観的に示されると考えた。また、これまでの先行研究で、覚せい剤精神病患者を対象とする報告はない。関心領域は、先行研究も多く、精神病発症にいたる脆弱性との関連性が示唆される海馬と薬物依存の危険性を高める脆弱性マーカーとして報告されている扁桃体を選択した。本研究により、以下の結果を得ている。

１．　患者は、健常者に比べ、総灰白質体積、全脳体積（灰白質体積と白質体積の和）が有意に小さかった。

２．患者の海馬、扁桃体で体積減少が確認された。そして体積減少の程度は、海馬においてよりも扁桃体においての方が強いことが示された。

３．　服薬量、薬物使用開始年齢、発症年齢、罹病期間、摂取方法、臨床症状重症度といった臨床評価尺度と測定された各体積間で有意な相関は見られなかった。

以上、本論文は、リクルートが困難な覚せい剤精神病患者を対象とした脳形態異常の研究であり、覚せい剤精神病患者の扁桃体の灰白質体積減少を初めて報告するものである。臨床評価尺度との相関は結果的にはみられなかったが、本研究は、日々、解明が進む精神病発症の病態機序に新たな貢献をなすと考えられ、これは、学位の授与に値するものと考えられる。